

川路大警視略目次

- 第一章 少年時代と其環境
 - ・誕生と其家系
 - ・与力たる川路家の地位
 - ・比志島村を中心としての地文人文
 - ・薩藩の内訌と君の奮激
- 第二章 島津齊彬公の偉大なる感化と訓陶
 - ・齊彬公の襲封と上民の翹望
 - ・開国進取主義と富国強兵策
 - ・大義名分土千古の卓識
 - ・公の薨去と士民の慟哭
- 第三章 藩内外に於ける君の活動
 - ・文久二年の上京と出府
 - ・久光公の帰国と海防準備
 - ・文久三年の薩英戦争と再度の上洛
- 第四章 王政復古と戊辰役
 - ・此志島青年の指導訓練
 - ・太守茂久公の上京と利良君等の従軍
 - ・戊辰役と利良君等の転戦
 - ・利良君東征の途に上る
- 第五章 明治新政と警察制度の創設
 - ・薩藩の軍政改革及び薩藩置県の準備と断行
 - ・警察制度の創設と其発達改良
- 第六章 征韓論の破裂と利良君の態度
 - ・征韓論の発端と西郷南洲の意見
 - ・大久保甲東の反対意見
 - ・岩倉右府の帰朝と閣議
 - ・岩倉右府一世の剛強
 - ・南洲の勇退帰耕と其余波
- 第七章 警視庁の創設と其活動
 - ・警察制度の確立
 - ・西南役以前に於ける警視庁の活動と其新施設
- 第八章 西南役と川路大警視
 - ・私学校党の暴発
 - ・私学校党の暴発以前の形勢
 - ・所謂南洲暗殺事件と川路大警視
 - ・南洲の大挙北進
 - ・島津久光公の休戦建白と人心の鎮撫
 - ・川路大警視の出征と警視隊の活動
- 第九章 西南役後の大警視
 - ・紀尾井坂の変
 - ・変後の大警視の計画
 - ・鳳駕扈従の大警視
 - ・大警視再度の外遊
- 第十章 大警視の余業遺芳
 - ・あ、天恩の優渥
 - ・遺芳千歳に薫す
 - ・諸名士の追懐談

・警保寮の動揺と利良君の確乎たる態度

第七章 警視庁の創設と其活動

・警察制度の確立
・西南役以前に於ける警視庁の活動と其新施設

第八章 西南役と川路大警視

・私学校党の暴発
・私学校党の暴発以前の形勢
・所謂南洲暗殺事件と川路大警視
・南洲の大挙北進
・島津久光公の休戦建白と人心の鎮撫
・川路大警視の出征と警視隊の活動

第九章 西南役後の大警視

・紀尾井坂の変
・変後の大警視の計画
・鳳駕扈従の大警視
・大警視再度の外遊

第十章 大警視の余業遺芳

・あ、天恩の優渥
・遺芳千歳に薫す
・諸名士の追懐談

大警視川路利良君傳略目次

- 大警視年譜
 - 第一編 西南戦争以前に於ける大警視
 - 第二編 西南戦争当時に於ける大警視
 - 第三編 西南戦争以後に於ける大警視
 - 第四編 諸名士追懐談片集
- 付録 警察手眼、大警視碑文



「西南戦争」で

陸軍少将を兼任。

日本警察の父・川路利良を描いた

稀書二点を合本復刻。

予約限定復刻

川路大警視

中村徳五郎〔著〕

付・大警視川路利良君伝

鈴木蘆堂〔著〕

■本書の原本は「川路大警視」（中村徳五郎著昭和七年日本警察新聞社刊）、「大警視川路利良君伝」（鈴木蘆堂著明治四十五年東陽堂刊）の二冊です。いずれも古書市場に出回ることの少ない稀少本です。復刻に際し、この2点を合本いたします。

■予約締切り前に「出版部数」を決めるため早期のご予約分は必ず確保できますが、「余分」は若干部しか作れません。また今回はいつもお送りしている「締め切り速報」のハガキは出しません。どうぞ予約特価にてお買い求めください。

■体裁	上製箱入
■定価	A5判・880頁 一万六千円 (税込一七二八〇円・送料別)
■予約特価	一万五千円(〒・税込)
■特価締切	29年3月10日
■発売	29年4月上旬
■予約限定出版番号入	
▼書店不卸	▼縮切厳守
▼返本OK	山口県周南市銀座2-13
08342295	マツノ書店
URL	http://www.matuno.com

(セット特価は申込ハガキをご覧ください)

京の警衛に充つ、之を第一號召募と稱す、後其の員中より三千八百七十人を以て、警視隊及び別働第三旅團の一隊に充つ。

尋て三月一日岩倉具視は、孫具定を東京より京都に遣し、天氣を伺候せしむると共に、時局に對する意見書を三條相國及び木戸顧問に呈せしむ、其の書中、東北警備として山形へ兵二大隊巡查三百名、越後へも兵二大隊巡查三百名を差遣するに決し、巡查にも同じく兵器を持せしむるに定めたるを告げ、若し今後兵員不足を告ぐる場合に於ては、東京に於て更に巡查三四千人を募集し、之に軍隊教練を施して戦地に出發せしめては如何との語あり。斯くて三月二日、巡查二百名を京坂地方に、同十七日三百五十名を大坂に、同廿九日八百名を神戸に、四月十四日九百名を、五月十一日二百名を、同十七日千九百名を、並に九州に、六月二日千名を神戸に、同月廿五日二百名、七月三日六百名を共に又九州に、七月十日八百名を特に鹿兒島縣に、八月廿九日百五十名を大分縣に、九月五日千五百名を更に鹿兒島縣に増遣したり。

田原坂の巡查拔刀隊

是より先き三月四日、官軍の主力たる第一旅團及び第二旅團は、田原坂の賊壘を攻め、別軍は吉次越を争ふ、是日賊將篠原國幹戦死す。八日福岡佐賀にありたる警視隊の大部分は、進みて肥後の高瀬に營す、大警部川畑雅長、大警部上田良貞、中警部園田安賢、中警部永谷常修、警部補隈元實道等之

が幹部たり、即日上田良貞隈元實道は二侯の官軍牙營に至り、戦線に臨みて戦況を視んことを請ひ、許可を得て直に戦線に赴く、時恰も田原坂の激戦に際す、會々征討參軍川村純義の觀戦するに逢ふ、純義は良貞實道を顧み田原坂の賊壘を指して曰く、嗚呼彼の藁爾たる一小堡を攻むるに日を費すこと既に幾日、兵を喪ふこと又幾百、頗る高價なる犠牲を拂へり、今壯士百餘人を選び萬死を期して左右より奮進突撃せしめば、彼の壘を粉碎せんこと必然なり、誰か既に拂へる高價なる犠牲に代ふるに、新に百餘人の決死的請負戦闘を以てする者なきかと。良貞之を聞き實道に謂つて曰く、川村參軍の言蓋し諷諭する所あるなり、我輩男子たる者、宜しく殊死血闘し、以て熊本籠城の友軍を救ふ亦本懐ならずやと、仍て此夜高瀬に歸り、之を川畑雅長、園田安賢等に告ぐ、皆之を賛す、是に於て良貞雅長安賢の三人、直に相携へて又二侯に到り、川村參軍及び別働第一旅團司令長官陸軍少將大山巖に謁して從軍を請ひ、翌九日更に征討參軍山縣有朋に謁して之を請ふ、有朋曰く、銃戦の兵は我れ未だ乏しきを告げず、宜べなり巡查七八十人の拔刀隊をして賊壘に突入せしめん、汝等克く之に當るか否やと良貞曰く、某等の望む所なり、請ふ巡查百人を以て之に當らんと、有朋之を諾し、命じて巡查拔刀隊と曰ふ、三人勇躍して高瀬に歸り、巡查中剛壯なる者百人を精選して一隊を編成し、直に田原坂に向ふ、爾來拔刀隊の奮戦は大に賊膽を寒からしめ、後數日にして遂に難攻不落の堅壘を陥るを得たるは實に其の功與つて多きに居る、而して拔刀隊の死傷甚だ多く、指揮官川畑上田園田の三警部亦重傷を



相補い合う川路大警視の古典的伝記

鈴木蘆堂著『大警視川路利良君伝』

中村徳五郎著『川路大警視』

作家 桐野作人

司馬遼太郎の往年の大著『翔ぶが如く』は大警視、川路利良の抱腹絶倒の逸話から始まる。すなわち、フランスのパリ郊外で汽車に乗っていた川路は急に便意を催した。ついに我慢しきれずひそかに車中で用を足し、たまたま持参していた日本の新聞にそれを包んで車窓から放り投げた。翌日それが露見し、パリの新聞に日本人の仕業だと書かれてしまったので、川路が往生したというものである。

この逸話の出典は、川路と親しかった同郷人の山下房親(ジャズピアニスト山下洋輔氏の曾祖父)の談話である。この談話が収録されている本が鈴木蘆堂(高重)著『大警視川路利良君伝』(東陽堂、大正元年刊)である。そしてもう一点、川路の伝記として知られているのが中村徳五郎著『川路大警視』(日本警察新聞社、昭和七年刊)である。

この度、マツノ書店が川路大警視の代表的な伝記二点を合本復刻するという勇断を下したことを歓迎したい。というのも、川路についての伝記や評論は、現在でも、戦前刊行のこの両著が質量共に古典的な地位を占めているからである。鈴木本は川路家文書をはじめ、同郷人や警察関係者の一次史料を使用していることが緒言からわかる。中村本も同様である。

さらにいえば、両著は内容や構成においても相補う関係にある。鈴木本は警視庁の創設から西南戦争前後が充実し、かつ川路の家族・親戚や友人知人の証言にもとづいた逸話も多数収録されている。それに対して、中村本は川路の全生涯をまんべんなく目配りしたオーソドックスな伝記スタイルをとっている。だから、両著を読めば、川路の生涯も功績も性格も逸話もすべてカバーできるといえよう。合冊という着想をしたマツノ書店の企画の勝利だといえよう。

川路の名がわが国近代史に刻まれたのは、ひとえに警察制度を確立したことによる。明治五年(一八七二)、川路は邏卒総長から司法省警保寮の大警視に昇進した。一説には西郷隆盛の推挙という。

それに伴い、川路は欧州を一年間視察し、各国の警察制度を研究して帰国するや、十カ条の「警察制度改正建白」を行った。そのなかで、川路は「ポリス」という言葉を使い、警察は良民保護と内国の気力涵養のためにあることを説き、内務省の新設、司法行政警察の分離、警視庁の設置、警察官吏の官等及び職制などを提案した。川路はとくに首都警備を重視し、警視庁の設置を訴えている。

川路の指摘どおり、同六年には内務省が創設され、大久保利通が初代内務卿に就任すると、警保寮は司法省から分離して、警視庁として内務省の所管となった。これは右大臣の岩倉具視が不平士族に襲撃された赤坂喰違の変の衝撃がきっかけだった。

川路は率先垂範をモットーとしたので、勤務精励は警視庁でも評判だった。警官はほとんど士族で占められていたので豪傑が多かったが、禁門の変や戊辰戦争で武功をあげた剣の達人である川路の威令には服したという。また警察官のバイブルといえる「警察手眼」を著して、各等級ごとに警官の心得を示したことも知られる。中村本はこのような川路の主導による警察制度の確立を余すところなく叙述している。

川路の生涯を大きく分けたのは、いわゆる征韓論と西南戦争における出処進退だろう。征韓論での西郷・大久保両雄の対立について、中村本も「是れ大久保内務卿及び川路大警視に関して、毀誉褒貶の由て来る所なればなり」と率直に認めている。川路に対しても、西郷の之恩を蒙りながらも、恩を仇で返したとして郷里からの非難が浴びせられた。

しかし、川路の覚悟は揺るがなかった。中村本に曰く、「君は能く公私の別を知れり、其の私を以て公を害せず、大義観(親)を滅するも、私恩の為に国家を顧みざるが如きは寧ろ死に勝る恥辱なりと思惟したりし」
川路も内心の葛藤があったに違いないが、西郷からの恩にこだわるのは私情であり、あくまで公私の区別を重視しただけである。

川路の毀誉褒貶でもっとも激しいのは、いわゆる「西郷暗殺指令」を出したとされる点である。中村本は「(暗殺指令について)吾輩も未だ遂に之を信ずること能わざるなり」として川路の無実を強調している。川路の伝記だから、その暗部に触れないのだろうという批判があるかもしれないが、私見でも暗殺指令は挙兵の大義名分を得たい私学校党一部激派の捏造だと考えている。私学校党に逮捕されて西郷刺殺を企てたとする中原尚雄の証言は拷問によるものであり、信じるに足りないからである。

一方、明治十一年(一八七八)五月十四日、大久保が落命した紀尾井町事件については、事前に不穏な噂があり、島田一郎など下手人たちの出身地である石川県の県令からも警告が発せられていた。にもかかわらず、大久保自身もそれを軽視してただけでなく、岩倉襲撃事件があったのに、周到的な要人警備を怠ったのではないかという川路への非難は免れないだろう。緻密で周到的な川路、生涯の不覚だった。両著とも期せずして川路の責任を指摘している。

川路の逸話については、冒頭に述べたように、鈴木本の独壇場である(中村本にも再録)。なかでも、同郷で川路をもっともよく知る山下房親の証言が随一である。「滅多に口を利かぬ」とか「道楽のない人」という指摘は川路の人となりを示して余りある。また有名な「鞆丸」事件も語っている。上野戦争で敵弾が川路の陰囊を貫いたが、理由あって生殖機能は無事だったという逸話も収録されている(被弾したのは磐城浅川の戦いとの説もあり)。

川路利良という堅物で一種の奇才がたどった足跡は、まさに幕末維新から明治国家が確立していく歴史と重なり合う。そうした人物をそれぞれの視角から描いてみせた両著だからこそ、その合本復刻を喜びたい。

内容見本

(原寸)

要を総合して、之を掲ぐれば左の如し。

大久保川路等が中原等をして潜在鹿兒島に入らしめたる目的の一は、西郷桐野、篠原の三人を暗殺するに在りと云ふも、吾輩は未だ遽に之を信ずること能はざるなり。殊に大久保と西郷との間は、政治上の主義定見こそ異なるべけれ、西郷は維新第一の元勳にして、大久保に取りては寧ろ先輩なり。征韓論破裂以來、大久保と西郷との個人的交際も阻隔したるに相違なきも、(六年征韓論破裂の時、大久保一翁、西郷の歸國を聞き深く之を憂へ、西郷に謁して其行を止めんとせしに、西郷曰く、大久保(利道)にして余の爲に謀りて忠なること、足下の如くんば、余豈強て國に歸るを欲せんや。大久保(一翁)之を聞き、兩雄の交際阻隔するの甚しか。大久保は或る程度迄は西郷の他心なきを信せしこと明白なる事實なり。故に大久保が刺客を派して西郷を暗殺せんとするが如きは到底有り得べからざる事なり。十年鎮定の後、大久保は一日自ら明鏡に對し、從容人に語て曰く、

予、自ら明鏡に對して、己れの顔色を照らすに、毫も灑々落々の態度なし。是れ或は西郷暗殺の陰險手段を弄せんとするものなりと誣言せられたる所以歟。男子の顔色は須らく灑々落々たらざるべからず、予は出身以來、時勢の變遷に遭遇し、幾多の艱難苦楚を嘗め來りしも、未だ嘗て敵者に對して暗殺の如き陋劣手段